麦林集 中

麦浪技

麥林集巻三

稲部

初秋

秋しらや此ハ原に夏の色

秋立や風ハうつ〻に蟬ふ〻〻

秋久ふ山ふ千ふのハ何ふ知の秋

雲英文庫

漫言はれ吹清しき初の秋
秋きぬと目にはさやかに見えねども
風のみぞ知る秋きぬとかは
秋きぬと宮よりそよぐ夕風
七夕
月は入日さしてさすがに音ばかり
明るきはてはあやぬれぬ
星合や織の枝をうつしかへ
織れそのかはやはらぐら
わのぬれあらそひ女七夕
彦星や三つ四つ二つ指ひけよ
新衣よ織ひ織ひ女七夕
千代の永さへあらぬ星逢
形水よ数ハかしふ星の袂
長星も言ふ夜や牛車

七夕にかしく深や弁婦人
立聖に一五ふれさるとき月ハ
秋風し夢ハ浮雁の行
頃城のそ秋色こそ河
七夕にくみ高ハ星ふ
夕風や浮雁ハ星ふ
立聖や秋河素の風つき
うそ聖に風と空弁の調へハ

星合や行雁ハ鳴ハ雪
天河横の京と行ハ
星合の演ハ京ハ詩と
星合や新頃ハ京のきハ

魂祭

指形ハ他人ハ多や魂ふ
蓮池と陽ハ京ハ

ことの葉を宮ゐや深草

不拾ふ花道ふりぬ玉ほこり

小車れ咲やもむまつり

宮の秋ともかぶ玉まつり

同ようえぬいろのいろ玉ぶ

廣の高小宮からう玉ぶ

鞠れ好もふ玉ぶ

菊八二日もちふ色三日

秋を高野紅葉れ深ぶ

好ふ高ふ猛ふや玉ぶ

八朔

八朔や行ふの星をかこ多

鶏ふ酒のふぬいふふ

着衣の好ふれ佐ふ

待月

待月に野辺の花やあるらふ
まつ月のひかりや豊かに秋の色
行末も月の名を帰とかりし
待月や立ちて居る者の行

各月

やまぶ山を行くやふれ月

各月や押合新駒六寸位
寒さ宗と白眼やうるの月
秋寂や行くえふの月
雲禅のうつ六寸程月
各月や移ると変ても永れ上
各月や山を照ともも
各月や演舞の名れ肯
各月や蓋うまるあれ先

名月や弱法師の扇の形さん
と言ひ行月は淋しき一口
名月や孫の顔も悔やまれ
三姉妹三方に立ち月
孫立の孫さへ見えぬ名月
立聖もなかはなれて月見ぶ
下もれ漕船の名も又名月
名月や文くれ郵便の名も多

名月や芋坂坊も傾けり
名月や寄生虫研究所
名月の月かさ高くなれば二階ぶ
仏壇の陰は孤一人名月
名月や岩戸の名も面白
秋名月蔵はさびきり月見ぶ
名月のうまいもの多やうの月
芋喰ふことを細き月見ぶ

名月や高く細く人の笠

水晶の芋洗ふやうや月の照

名月や雲の形もわかぬもの

朝霧村ゝ

翌日の秋又見や里の月

高井氏

名月や乾ゝ泳ぐ秋の山

高後氏

名月や高い七歩の家を見る

童墓寺の里に移る

月のうち苅てや子猫此一畝所

十六夜

十六夜や赤山の寺人ゝ照

十六夜や水の月北雲が谷

名月又二八ゝんの月見哉

十六夜の月や此世の名残

鹿

鹿の声北斗に届く山の端さびし
鹿は恋人心に角はさもうとう
鹿の恋人の牛よりも角はあれど
角ばしい鹿の声や秋の鹿
恋思の角もさびし鹿の声

重陽

鹿の声や小倉山ふる里よ
若葉や鹿の赤ちゃん天河
田のあぜ引のそうそう菊の雲
山吹は角ハ長ちゃ鹿ち寿
冬ぶすはうさいくや鹿の長
鹿の声や赤山ふる紅葉山

なほ移ふも頻赤やうの花
八重菜もろふの日は白れる
春人の白しよろやはのうふ
破りうるるはもはは山霞い
菊何へ初りうそれ付る
住と入れん付よも有菊白
殺心も穏よ忘くうきく立
孫右衛

菊のは北甘露を打うは橋の痩
病後此
菊北りの児工置りや永天宝
十三夜
望人よ移恋自や大至白
聴もいも仕立うく拵北自
詩歌よも不玉うく至忘自

見かゝハ不知何ゝの此月見ハ

題山

陽ゝ田をかゝへゝ野やTこ秋

題海

敵ゝの姿ハ幾つもTこ夜

閑居

世界一把他の蒲柳や秋月

稚 以下不方題

好性ゝ人仕ゝ乞ゝ乞ゝ乃乃変

初乃や一ゝ多ゝ帝ゝ文字ゝ宮

世の中ハ頃ハ好しTせ秋

乞ゝ有ゝ眠わゝゝゝゝ行ゝゝ氣

題 庚寅頃

こゝよりは雲の女郎花
秋も深く脱ぎ捨てゝ見すぼらし
入相を作向くゝ哀れ不堪ぶ

途中吟

山高く水清くして美しき
豆腐の様に風の強ぶ
蕎麦よりは時雨ぶ恋ぶ
鮒鮨や弁のあらくハ白ぶ

月後律庵を訪ふ

蕎の傾く方へ行く形方
頃百姓ぶ
蕎に習ん頃百姓ぶ
蕎畑を訪ふ

蕎の実もうれたるかやの家
きりぐす沢蕎麦のもしとみるとも
蕎の間をさらさら鶏の鳴く

春と布袋の宮に詣で桜を
賞の名残をしたへ流れ〳〵火絶ぐ
夕日も花仕舞に成らんと
西東に成ふるまう角力を
後世のわすれ草や川の端
名所やいにしの世より此所を
夢幻の楚人冠の稲荷も
加茂も所の美しさせし

夢幻玲瓏と言ふ夕日は新緑
住吉住吉ふも般若寺や稲の車
衣笠に孫ひき点の東山ふぶ
秋かく万葉の東山ふ
万葉に詠ふ東山ふ
明るふ山き巳ふ
きも孫ふ新緑ふけて夢は
新無嶽ふ〳〵

山路を来しくれなゐの葉よりも色濃かりけり

草茅の君を体主女郎花

故生會

山雀や藪を出でしく程を舎

菊月の五日の朝もかほる男山

一ノ瀬を体を見る

端山の梢のもみぢ見しかな

洞れの菅原ゆくへ〳〵葉山

叮川の流れもよし村雨の

梢は日吏よ蒸し五葉の

行末を産土を祈る八

弁の花は多をかりくや為紅葉

蓑提山よりく

林間よ仁王も碩ふくもみぢ

五葉ふる秋雨や蓑提山

陽こそのもの流れよ孫の神

古戦場より

殺ちきる行もとゝり雲うつる

俤の木ゝ梢より梢へ落る滝

風寒き山中より

市の家に煙やどる秋の水

一ノ滝より

一の滝もとゝい袁滝を秋北方

加賀山中温泉より

仙人ゝ雲を陽入の鐘北斗

見ゝつゝ新蕎麦彫物

初秋北

寂しさに門より入ゝ三ヶの月

文月六日北

翌日祈待彫のものゝ山や星北斗

題栄寿寺

百八ゝ鐘ゝ雁や古ゝ道

山田氏何系のものなるや
茶の香に中や瓦院の茶
源治の新茶に同じく
香色の羽根も休めて居る
一八風よりやうく
春気の一枚肥うすの浪
称行院より移れく
永八味茶より茶に茶
吸氏より脇系しく
孫の茶に編れかうの茶ちく
児童に茶しく
婦人に肱の焼きを於仕色
午御に茶に移れく
世に香に茶八二同じ菊のも
葉茶より茶しく
取茶より同じ五君に角しば

五十三次の内
菊の花に秋と言葉を入れ
移す言葉にて
生きつゝ
こゝ
菊は秋一面に
屋敷の
その間も
百氏と代を休く
山の端を
一茶庵
宣旨を
百氏の
秋深し
五拍子
この菊

源氏よりは
秋うらゝ若草よりまさるべし
山田氏の高野聖より
秋八月は伊吹より
信長の伊勢に
伊勢より堅田の
雪仏文志より劣
又婦人やと
白鳥やと
弥の上田より
変化は若草にまさるべきや
東武貴国より劣
日蓮のうらへとまさるべ
信長連化の俳諧の上賞と称し
さもあるべき八月の
明月の賞は
自讃の賞は

雪仙のおもかげ芦に乱れ〳〵

落ちもはてしへも残るや芦の花

出雲より江戸へ出て一泊より

あるかなきかの雪をもとめ〳〵

ふるゆきにふのりのやせの〻

氷人の肥力を破れ雪仙貝と

神よしく三文の月より雪

此夕嶺を敲く

貝より恋を孤の角をこえぬ

凡探子〻〻

常盤木も律の拍子や面影屋

未雪〻〻

打ちそし眼よむ人はふる新

一ぞ弗三房のかげ藤上磯崎

の立ちもしも山茶花の花ぞ

ぐりぐりいい茂 秋法師とぞふる

くそ此時を序此奥と打り

蛍のわたる宮ゐ[illegible]地体俗ぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初歴の[illegible]

秋風や[illegible]

行[illegible]

[illegible]

かゝる氏のわたる[illegible]

[illegible]

[illegible]

恵のゐよはわ[illegible]

ハ十の義は且[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のくんとうぶ〳〵萩原の里に
なよ竹を結び一所の里を作る
もそこの人これ助力なり
されは国住上人はせの中
すゝふ云合やんといふ
も今〳〵此秋の〳〵

山うけや萩のとてもつ〳〵世界
弥の五重の塔名わすれるとと
ゆきく〳〵

名かりの杖もあやうき老の身は酒
除るよい賜ら時でも秋長者
そのいそ人孫よう〳〵秋の苔
秋は苔てれり漕ち捷乃苔
ゆうはや秋い扇よ京ヤ〳〵
不在の名よ苔〳〵
山在のそしう好者 猶い表い

暮秋

秋の道〳〵古国を尋ぬる
猶〳〵幕〳〵猶〳〵秋を
猶〳〵秋や訓仮ぬるものを
猶秋の尾とうへうや芋うう
や〳〵姿の猶詠〳〵絶て哀
況猶如心はまさを秋哀芋
や〳〵鮫嶮〳〵猶〳〵秋の芋

秋の芋猶頃の嵩もはけ〳〵猶
九月毋八尾もうさ況秋芋如
九月哀八尾
頃是嘉是中而如神送

麥林集卷四

冬部

十夜

小坊主此伯父より書る丁板ゞ
祖父祖母の京より送き丁板ゞ
夢現い立往生の丁板ゞ

蓮池い根ごねをして取る
宝屋敷もおもしてあるて夜ば
なるほどうれしさの取の涼帽子

時雨

主人の信多寺へ初しうて
牛のふも鼠書るふる時雨ば
たそろき雨もしや初ほ雨

ふるい寺れ何しく孤れ初れ
本尾の麻やうしてふい時雨うれ
神仏ふるふる待て時雨うれ
孤小家の後ふしい行初ふれ
雷鳴ふうちい寄ふれ時雨ば
便い降れさう一の高や初時雨
瓢箪の蔓も寄やや初しうれ
宮仏ふふ双ば後やうれ時雨

千鳥

[illegible]の淀もすくなく乳
吹のやまもと川の浮洲に
鳴ちどりあるかなきかぶ
里の秋は梨地よりやはれかな

小倉より

六ちりてはゝ又打ぬ川なり

雪

初雪や雨とまぢりぬ霰ちる
高の雪は[illegible]の雪
夢さめは雪の降やと[illegible]
国のまれ敬る果ぬやはれの雪

天保ゝより

雪見[illegible]

有明の月の夕日は
海髮中の夕日のかきあ
月の夕日の夕日
夕日の夕日の夕日
吹きて小火の夕日の夕日
夕日の漁村の夕日

曙八

猟八や八俵の苅もの山をおく
猟八や柳も眼ぬき初
埋火や曙見ぬ里の人
猟八や雪を書て屋根屋
猟八や猫の夜寒八時ぬ

冬　以下不分題

木兎の目さめきたりて蕎麦の葉ふる
鶏うしろ　丸雲よりうる蕎麦ふる
秋よりうすくなりてと蕎麦ふる
木枯や蕎麦の実　農雲
かへるの日の霜ふるそうそうとして
秋風と吹よりうすく　冬花

夜花と霜ふる　懐よ
又人ふるよ　三毛や大根引
ぬるうに和ぬるよを大根引
十方に星ふる　大根ふき
夏草や一歩ハ人の句　風
夏荷ハ女もうの紙きれ
枯芋よ蕎麦　ふ　池の鴨
遠ニ月や　神ふたさる燭

[illegible]
のけしき[illegible]
[illegible]
むかしの[illegible]
[illegible]
蛇の[illegible]
[illegible]腰も[illegible]
[illegible]

[illegible]
不のうに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雪月花を詠ぜ探く

白雪や一項新く雨蔵主

雪よりも上戸吹幸象　鶴

冬の月白し豆腐よ梅の花

冬枯の野や蔵うん梅乃ふ

山寺よく

仮寝を咲かう冬枯梅

冬枯と雪うるを赤梅

病牧吐

乾坐り寄枕ゆ寄枕弁

寺院の蔵東

蔵東しらもつ新方枕者

題　後羅

水仙よ寄く寄ハ寄う乃東

畜生

鶏の忘れていハ東　蔵　鶴

東道の彩雲を吹しく

東よりて尾鰭の手や五月頃

くう好女よ苔しく

水仙やうのよさうの身の香

隣よも四やうぬ鄰や老社丹

孩夫の入麿の時

世北牛のかゝり現事 唐 永

東茶の加さう年の苔ん

百北陸尾ようしまの言ナバと

ナ六しるうへし

ゆうしは尾よるる百もうまり

京の朝京人を召く

京ゆうゆ我と吟鄰や宵北朝

兎士うまるよう

色義孤一福 然しく 事加東

越の人よ苔しく

笠はた名の細代に笠はてゝ又千住川
伺ふ所の鴨と称とを思ひ起よ
鴨の羽ぞ傳しく取とやなの稱
葉名可ふ名に語ふ時
滝ふとりとたのもしくふ取
しなふ三ふ拔ふく
重屋上乾くに時白のやうに成
又条坊三逕ふまく

白鷺に高く投得ふ初しふ投
猶食民ふ拔ふく
取石の志あり加減やふ時白
越の至朋ふ時白峰と結ふく
時白新しふ名甲斐わに二ふ
ふ〳〵めく書屋の京屋と結ひ
ふいふの武道ふと其の人ふ
富士に又形ふ望もたく

[illegible]

見龍の土産とおぼしき時

[illegible]

世の白扇とも萱草といふ

[illegible]

男女ともに[illegible]

小原女と化粧ハ夏〳〵　北嶺雪

歳暮

[illegible]

麦畑ハ[illegible]

[illegible]

根源一把峰よりまさを忘れ竹

夕顔の花よりはかなき花の色　北京

雪どとうれ陸奥よりも芳年の京

四季屋のまさを

雪夜秋

ふるあらしまを忘

金不うれ本魂よ線ゝ掃をう

線掃や雲きさきも筆よれ秋

歯朱猛火燈のうつ　蕉

病好吐

雪一張直ちをもやとり北坂

城衣ちゝ京ゝ京や金不の衣砧

ゝ京の燈籠よ抜ゝ

燈もよう　那ゝ北ゝ二階ゝ

ちさしきさきよりのを

浸けよわ大思沢中ちゃん

たうきゝ名のゝ京ゝのとゝ

世の方ゝ世ゝ如も燈ゝ北沢中

候ハヽ行かゝるゝやうにとて　かつ
茶の役ゝいつるゝなどゝ下に
至為ゝたまゝ茶ゝ茶ゝ茶ゝ茶ゝ茶ゝ茶ゝ
ゝゝ此方朝鮮の嶽乃ゝ茶ゝ
物語ハ新今とやうに茶ゝ
永数七百の行者や　ゝ　長方
所中此師を交れ在　ゝ
ゝ此を茶ゝ形ゝ在ゝ

孫方ハ孫ハ方角のうつゝ
大王の日ゝ方ゝ孫ゝ孫
丁掃ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ
物ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ
ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ
ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ
孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ
一ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ

年内立春

梅の香は一本切にやうぐいす春うち
伏保姫の若い春くらしまの内
春風にうぐいすを誘くやとしは内
うぐいすのうちよりのうちのそよやあの
春うらやうぐいすの鶴よ多の紙
笠もと一首 詠うらうらおうら

橋向齊

風林